



Title	Chaucerの散文における語順：文の主要素に関連して
Author(s)	金山, 崇
Citation	大阪外大英米研究. 1966, 5, p. 1-32
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/98960
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

Chaucerの散文における語順

——文の主要素に関連して

金 山 崇

現代の英語に慣れた人が Chaucer の詩に接して驚き、また時としてとまどいを感じるものの一つに、その語句の配置の比較的自由さ、柔軟さがあると思う。このことは F. Mossé が ME における語順が柔軟であることを述べて、
'a trait, it might be added, that makes ME initially very difficult for speakers of Mod E.'⁽¹⁾とし、榊井教授が Chaucer の韻文と散文を比較して、
「散文は比較的正規の語順に従う場合が多く、目的語の位置や従属節に顛倒した語順が現われることに気付くけれども、韻文の場合だと一見して語の配置が自由で制約をうけないようにさえ感じられる。」と述べられていることでも裏付けられよう。具体例を一つだけ、その現代散文訳と共にあげてみたい。

"In nouncerteyn ben alle youre observances,

But it a sely fewe pointes be;

Ne no thing asketh so gret attendaunces

As doth youre lay, and that know alle ye.

But that is nat the worste, as mote I thee!

But, tolde I yow the worste point, I leve,

Al seyde I soth, ye wolden at me greve.

(Troilus and Criseyde BkI 337~343)⁽³⁾

All your rites may prove in vain, save for a few pitiful matters; and yet no faith demands such devotion as yours, you know full well. And that is not the worst, by my troth, but if I told you the worst point, however truly I spoke you would chide at me.⁽⁴⁾

この一節にも見られるように主語と述部の顛倒が極めて頻繁に行なわれるのは、Chaucer の詩においては珍しくないことであり、この他にももつと変化に富んだ語順の型はかなり多く見出される。ところでこのような語順は、もとより詩の要求する韻律や押韻に対する考慮からも生じたと考えねばならないが、現代英語における語順感覚からすれば、そのような要因以外のものも働いていたのではないかと思わざるを得ない。一体どの程度までこのような統語的自由さが Chaucer の英語、ひいては十四世紀の英語にあったのだろうか。詩にあっては脚韻や韻律の要求が統語法と複雑にからみ合っているためこのような柔軟さの許容される範囲を見極めることはなかなか容易でないことは、舩井教授も指摘されている。⁽⁵⁾では一般的に詩に内在するこのような要因を比較的含量むことが少い、散文の場合はどうであろうか。散文の語順を知ることによって、彼の韻文における語順の自由さの中にも、脚韻、韻律以外のある制約が見出されうのではないだろうか。これが本文の動機となったところである。

Chaucer の散文における語順の研究は Kennedy,⁽⁶⁾ Hammond,⁽⁷⁾ Griffith⁽⁸⁾ の Bibliography を見ても数少ないようで、しかもその大部分は年代的に古いか、あるいは学位論文の類で入手は困難であるために貴重な資料を参照できないのは残念であるが、ただ W. Świeczkowski の著の中にわずかに言及されているのは、F. Heussler の論文で、これは Melibeus と Parson の物語における主語と述語の位置を扱ったものであるようだ。⁽¹⁰⁾いずれにせよ語順に関して Chaucer の散文作品全体を対象にしたものはないようである。さて本文の調査対象となったのは Robinson の第二版にもとづく The Tale of Melibee (Mel と略称、以下同様)、The Parsons Tale (Pars … Retracciouns を含む)、Boece (Bo)、Astrolabe (Astr) の四つである。なお The Equatorie of the Planetis の言語については、R. M. Wilson 教授の Linguistic Analysis⁽¹²⁾ に詳しいが、語順に関しては特に触れていないようであって、これは別の機会にとりあげてみたいと思う。

Chaucer の散文作品は、仏・羅の原典を翻譯したものが大部分であるとされている。このような翻譯文を材料として語順の問題を扱うことの余り適当でないことは L.H. Gray の指摘の通りであるが、⁽¹³⁾ Chaucer が自己の言語材料を用いて写したものである限りは、多少の不自然さがあっても、苦心の結果生み出されたこれらの文章には彼の、そして当時の英語の姿が少くとも語順についてはかなりはっきりと現われているのではないかと考える。またかなり originality の含まれていると言われる、Astrolabe の序言や、Retracciouns の英語と他の彼の散文を比較してみても、語順の点については著しい相違があるとは思われない。ともあれ、十四世紀後半の ME 散文の一つの姿として捉えてみても無意味ではないと思われるし、同時代の Wycliffe, Richard Rolle, Hilton などの散文との比較にも役立つと思う。

語順と言えば広義には語の配置のすべてを包含するものであるが、ここでは普通に言う主語、述語動詞、目的語、補語といった文構成の主要素の位置をとりあげ、形容詞や副詞などの副次的要素については改めて調べてみたい。

⁽¹⁴⁾ Jespersen が MEG vol. 7 で、SVO の主要素がこの順に記列されている割合を作家などについて調査報告しているが、これによると Chaucer の場合、韻文では51%が、散文では84%がこの語順をとっている。この数字の当否は別として、確かに Chaucer の散文は韻文と異なり、現代英語の語順感覚でいてかなり素直に読みとりができる。しかし、散文の内容によって一般的に文体が変わってくることは当然としても、共通した印象は、物語風の Melibee にせよ、説教の Parsons Tale にせよ、また科学論文式の Astrolabe にせよ、いわゆる倒置 (inversion) の語順が非常に多く見うけられることである。

Jespersen の前出の統計を借りるなら、例外はまああるにせよ現代作家においては SVO の語順が90~95%を優に越える比率であって、約10%の差がこの印象を生んだことになる。ここでは現代英語の語順と対比することはせずただ

Chaucer の散文英語に関して記述するだけであることを断っておきたい。と

ころでかなり興味のあることには、先にあげた同時代人の散文に一部接した印象は Chaucer の場合とは異なって倒置の語順が比較的少いことである。特に Wycliffe や Richard Rolle についてはこの感が深い。⁽¹⁵⁾ 僅かな資料からの速断は避けねばならないのは勿論であるが。

§ 1 Chaucer の散文においては次の例に見られるように文の主要素は SVO の語順によるのが大部分であったと言ってよい。

(1) Whan Prudence hadde herd hir housbonde avanten hym of his richness and his moneye, dispreisynge the power of his adversaries, she spak, and seyde in this wise:…(Mel 1551)

(2) “Now, sire,” *quod dame prudence*, “and syn ye vouch sauf to been governed by my conseil, I wol enforme yow how ye shul governe yourself in chesyng of youre conseilours. Ye shul first in alle your werkes mekely biseken to the heighe God that he wol be youre conseilour; and shapeth yow to swich entente that he yeve yow conseil and confort, *as taught Thobie his sone*:…(Mel 1115~7)

(2)では斜体の箇所を除いて、主節、従属節を問わず SVO の語順になっている。ところでこのような正常語順が行なわれないのはどのような場合か。以下代表的例文を出来るだけ各作品から引用しつつ調査しえたすべての正常ならざる語順の起る場合を見ていきたい。

§ 2 主語と述部動詞の正常な位置が乱されるのは、文の始めに特定の要素が置かれて、それと密接な関連をもつ述部動詞が引きつけられて主語に先行する場合である。この特定の要素とは Chaucer にあっては、目的語・補語及び副詞、ときとして接統詞である。これらのうち副詞は数も種類も多くあるので、数少い接統詞を含めて一つのまとまりとし、以下目的語、補語とそれぞれ別に、次に平叙文について、最後に疑問文、命令文、感嘆文について述べることにする。ただし統語上当然と考えられるものは省いた。e. g. 関係形容詞＋名詞（目的格）や目的格としての関係代名詞など。

以下に扱った語・句に関して、特に断ってある場合を除いて、正常な語順 (SVO) ならざる例は約2,100件以上、その内、then が最も多く335、以下括弧内に示す。as (105)、副詞句 (165)、there (99)、yet (83)、so (82)、頭位の目的語 (73)、直接話法伝達の様式 (100以上)、therefore (69)、now (68) 倒置による譲歩表現 (55)、頭位の補語 (42)、al (100以上)、thus (31)、疑問文 (100以上)、感嘆文 (12)、命令文 (23)、than (14)、heere (19)、therof (12)、the+比較級 (10)、wel (9)、unnethe(s) (9)、heerof (7) でこれ以外は5回以下でその中大部分が1回である。

§ 3 さきに言及した W. Świeczkowski の著には、“Heussler states that the predicate-subject is usually found when it is preceded by an adverb, especially *then*.” とあり、統計はあげていないことを注している。⁽¹⁶⁾ そこで then (tho を含む) が頭位に来て起る倒置、非倒置を比べてみると次のようになった。ただし命令文、疑問文の頭位にこの語がある場合や、平叙文でも、then 以外の語句も倒置を起すのに与っていると思われる場合や、後続の文に動詞が欠けていたり、存在の ther is ～構文、また構文が破格になる場合は除いた。

	Inversion	Non-Inversion	Total
Mel	2 4	9	3 3
Pars	6 5	3	6 8
Bo	1 4 0	5	1 4 5
Astr	1 0 6	1 6	1 2 2
Total	3 3 5	3 3	3 6 8

つまり then が頭位に来れば91%あまり倒置が起ることになる。この場合動詞が複数の要素から成っている時には大部分の場合そのうちの一つが先行して主語の前に出て、他の動詞要素は主語の後に来る。これは以下の各節にも一般的に当てはまる。

- (1) *Thanne bigan Dame Prudence* to maken semblant of wra-
tthe, and seyde:…(Mel 1687)
- (2) *Thanne is ther constaunce*, that is, stablenesse of corage;…
(Pars 737)
- (3) Man sholde loven hys wyf by …; and *thanne is she* as thogh
it were his sister. (Pars 861)
- (4) *Tho wolde I wite* the same nyght folewyng the houre of
the nyght,… (Astr II, 3, 39)
- (5) But yf thee liketh thanne to loken on the derknesse of the
erthe that thou hast forleten, *thanne shaltow seen* that …
(BoIV, Ml, 14)

しかし次のように倒置しない場合があるが理由はよくわかりかねる。

- (6) *Thanne the wisest of hem three answerde*…(Mel 1816)
- (7) and *thanne he wol shryven hym*;… (Pars 1066)
- (8) *than thou shalt finde* that… (Astr II, 42, 10)
- (9) Whanne it forletith the knowyng of itself, *thanne it is
brought*… (Bo II, P5, 153)

§ 4 Yet も頭位にくると倒置を惹起することが多い。ちなみに §3 と同じ条件で Parsons Tale の最初の 604 行（全体 1080 行のうち）を調べた yet に関する倒置と非倒置の数の比は 19 : 3 であって極めて倒置を起す可能性が大きいことを示すと思われる。以下いくつかの頻度の多い語については同じ範囲での比を括弧内の数字で表わす。(1)のように yet は *natheles* をよく伴う。

- (1) But *natheles, yet axed he* hire conseil upon this matiere.
(Mel 1010)
- (2) and *yet be ye fouler* for youre longe continuyng in synne…
(Pars 139)

次のように倒置しない場合があるが(4)では主語が軽く動詞が二つあるからであろう。他の副詞などが頭位に来て倒置となる時でもこれは時としてあてはまるようである。

(3) and yet his resoun refreyneth nat his foul delit or talent.
(Pars 294)

(4) yit it envyrowneth and comprehendith alle thingis sensible:…
(Bo V, P4, 208)

なお、yet と意味の類似した natheles は倒置を起すことは少いようで、次の(5)、(6)のような場合、この語よりむしろ次に来る語が倒置を起しているかも知れない。

(5) But natheles this rule in generall wol I warne the for
evere:… (Astr II, 4, 63)

(6) But natheles som tyme is everich of these planetes under
the same lyne. (Astr II, 4, 63)… cf. §17 (10)

(7) But natheles suffise to the these trewe conclusions in
English as well as sufficeth to these noble clerkes Grekes
these same conclusions in Grek;… (Astr Introd. 28)

§ 5 So は単独、または right so の形をとって、(right) as などと相関的に用いられて倒置を起す場合が最も多いが、非倒置になることも比較的あるようである。(9:6)

(1) Right as a singuler persone synneth in takynge vengeance
of another man, right so synneth the juge if he do no ven-
geance of hem that it han disserved. (Mel 1435~6)

(2) And aboven alle wordly thyng she sholde loven hire hous-
bonde with al hire herte, and to hym be trewe of hir body.
So sholde an housbonde eek be to his wyf. (Pars 937~8)

(3) And evere as the sonne clymbith upper and upper, so goth
his nadir downer and downer,… (Astr II, 12, 19)

(4) And in as muche as thilke love is the moore grevous to
perfourne, so muche is the moore gret the merite;…
(Pars 529)…主語は merite.

(5) For 4 is the thirdd part of 12, so is the space between

thee and the tour the thridde part of the altitude of the tour. (Astr II, 41, 11)

- (6) But no sodeyn mutacion ne bytideth noght withouten a manere chaungynge of corages; and *so is it byfallen* that thou art a litel departed fro the pees of thi thought. (Bo II, P1, 33)

(4)では *is* が the merite のすぐ前にくるのが正常なのであろう。この他に成句的に *if (though) so be (were)*, —しばしば *it* を *so* の前に伴う— という形式があり, *so* は必ず動詞の前に来る。この表現は頻出する。

- (7) *Yif so be* that thou may not come to the bas of the tour, I see him thorw the nombre of 1;… (Astr II, 42, 2)

また *also* が倒置を惹起することがある。

- (8) And right so ben we gladde sometyne of the face of the see whan it is cleer; and *also merveylen we* on the hevene, and on the sterres… (Bo II, P5, 59)

- (9) So as bounte and pruesse ben the mede to good folk, *also is schrewidnesse* itself torment to schrewes. (Bo IV, P3, 65)

非倒置の例をあげる。

- (10) fyr fayleth anoon as it forleteth hir wirkyng, and *right so grace fayleth anoon* as it forleteth his werkyng.
(Pars 250)

- (11) “right as…, *right so thilke deeth entred* into alle men that synneden.” (Pars 322)

§ 6 *As (als)* も様態などを表わす接続詞として倒置を惹起することはかなり多く、また比較において別の *as* などと相関的に副詞として用いられる時は倒置を起すのが普通である。様態の節内の動詞に *be* や *do* が用いられる場合には倒置が多く見られる。(6 : 17). (1),(3)の型は *Parsons Tale* や *Melibee* に特に多く見られる。(5)~(8)は比較を表わす文である。

- (1) For, *as seith Seint Augustyn*, “If a man love God in swich manere… (Pars 383)

- (2) shapeth yow to swich entente that he yeve you counseil and confort, *as taught Thobie* his sone... (Mel 1117)
- (3) The thridde is this, that he that is irous and wrooth, *as seith Senec*, ne may nat speke but blameful thynges,... (Mel 1127)
- (4) and that oo half declineth sonthward; and that othir northward, *as plainly declarith the Tretys of the Speer*. (Astr I, 21, 82)
- (5) "The dedes of batailles been aventurouse and nothyng certeyne, for *as lightly is oon hurt* with a spere as another,' ... (Mel 1668~9)
- (6) For Cassidore seith that '*as yvele dooth he* that vengeth hym by outrage as he that dooth the outrage.' (Mel 1528)
- (7) '*Als lightly*,' quod he '*may oure Lord God Almyghty yeve* victorie to a fewe folk as to many folk;... (Mel 1661)
- (8) And as well as ye wolde eschewe to be called an avaricious man or chynche, *as well sholde ye kepe* yow and governe yow... (Mel 1619~20)
- (9) "The derknesse of deeth" been the synnes that the wrecched man hath doon, whiche that destourben hym to see the face of God, *right as dooth a derk clowde* bitwixe us and the sonne. (Pars 185)...dooth は代動詞

次のような非倒置の場合もある。

- (10) and *as high is the pool artik* fro the orisonte *as the equinoxiall is fer* fro cenyth. (Astr II, 22, 4) 後の *as* 以下.
- (11) Was thanne myn habit swich *as it is* now? (Bo I, P4, 18)
- (12) I am al redy to chaunge my conseilours *right as thow wolt devyse*. (Mel 1263)
- (13) Swiche manere of thoghtes maken a man to have..., *as God seith* by the prophete Ezechiel:... (Pars 140)

(10)については同じ比較の節で倒置している *that is digne of moore blame, than worth is al the preisyng*. (Pars 494) が対照される。

§ 7 Therefore も倒置を惹起することがかなり多い。(24 : 10)

- (1) And *therefore seith Salomon*... (Mel 1186)
- (2) And forasmuche as a man acquiten hymself biforn God by penitence..., *therefore shold he preye* to God to yeve hym respit a while to biwepe... (Pars 179)
- (3) In this heved of Cancer is the grettist declinacioun northward of the sonne, and *therefore is he clepid* solsticium of somer;... (Astr I, 17, 5)
- (4) "This is open and cleer," quod sche, "that alle othere things ben referrid and brought to good. For *therefore is suffisaunce requerid*, for it is demyd to ben good.(Bo III, P10, 208)

しかし次のような場合もある。

- (5) And *therefore oure Lord Jhesu Crist seith* thus,...(Pars 116)
 - (6) yet nathelees, for as muche as bountee aperteneth proprely to the Hooly Goost, and Envye comth proprely of malice, *therefore it is* proprely agayn the bountee of the Hooly Goost. (Pars 485)
 - (7) And *therefore o vengeance is nat warissed* by another vengeance, ne o wroong by another wroong,... (Mel 1286)
- Therefore と同じ意味をもつ forthy も倒置を惹起することがある。
- (8) And *forthi is it* that... (Bo II, P7, 109)
 - (9) For-why, for thow art confunded with foryetyng of thiself, *forthi sorwestow* that thow art exiled of thy propre goodes,... (Bo I, P6, 72)

Wherefore は似た意味からして当然倒置を起すはずだが、事実は一例しか見出せなかった。これは therof に対する wherof の関係でもあるように思われる。倒置になる回数は散文作品全体で、(therefore)69 : 1 (wherefore), (therof) 12 : 1 (wherof)であった。

- (10) Another is to be benigne to his goode subgetis; *wherefore seith Senek*:... (Pars 467)

§ 8 文頭に立って, *then, yet, therefore* と同じく倒置をよく惹起するものに *now* がある。非倒置になることはかなり少いようである。(15:4)

- (1) *Now been ther two maneres of pride*:... (Pars 409)
- (2) *Now, sith that I have toold yow of which folk ye sholde been conseilled, now wol I teche yow which conseil ye oghte to eschewe.* (Mel 1172)
- (3) *And now is my sonne gon* to reste as for that Saturday.
(Astr II, 12, 29)
- (4) Certes the dignyte of the provostrye of Rome was whilom a greet power; *now nys it no nothyng* but an idel name,...
(Bo II, P4, 82)
- (5) O goode God, wel oghte man have desdayn of synne, sith that thurgh synne, ther he was free, *now is he maked bonde.*
(Pars 149)

非倒置の例をあげる。

- (6) *Now certes, a man to pride hym in the goodes of grace is eek an outrageous folie*;... (Pars 470)

§ 9 Thus もしばしば倒置を惹起するのは, *then, therefore* などの先行する文の内容を受け継ぐ副詞が文頭に来た場合と同じである。(6:1)

- (1) *Thus sholde ye understonde* the philosopre that seith,...
(Mel 1094)
- (2) 'and thanne wol I sleen hym with myn hand in dede of synne'; *thus seith the feend.*" (Pars 356)
- (3) And *thus knowe I* this conclusioun. (Astr II, 1, 15)
- (4) but natheles it is so, and *thus stant this thing.*
(Bo IV, P2, 191)
- (5) *Thus scheweth it* that Y may make semblable skiles of the purveyaunce of God... (Bo V, P3, 71)

しかし時として倒置にならないことがある。

- (6) And *thus the curteis Lord Jhesu Crist* ne wole that no

goode work… (Pars 246)

- (7) And *thus moche I seie*, that the laste charge of contrarious fortune is this:…(Bo I, P4, 298)

§ 10 There は実詞の場合と虚辞の場合があるが、いずれも文頭にあると倒置が起っている。最も多く見られる動詞は be 動詞であるが、その他にもこの構文で用いられる動詞は多い。

(A) 虚辞の場合

- (1) In this forseide develes fourneys *ther forgen three shrewes*.
(Pars 554)

- (2) For soothly, whan that werre is ones bigonne, *ther is ful many a child unborn* of his mooder… (Mel 1041)

- (3) This chapitre is so generall evere in oon that *there nedith no more declaracioun*;… (Astr II, 2, 11)

- (4) Whan it was in the soure hungry tyme, *ther was establised or cryed grevous and unplitable coempcioun*,… (Bo I, P4, 81)

(4)のように動詞の部分が分離しないでいることがあるが、これはそう多くなく (cf. §3)be+p.p. の動詞群によく見られる。

(B) 実詞の場合

- (5) loke thou and byhoold the heightes of the sovereyn hevene.
Ther kepin the sterres, be ryghtful alliaunce of thinges, hir olde pees. (Bo IV, M6, 3)

- (6) The serpent seyde to the womman: “Nay, nay, ye shul nat dyen of deeth;… And whan that they knewe that they were naked, they sowed of fige leves a maner of breches… *There may ye seen* that deadly synne hath, first, suggestion of the feend, as sheweth heere by the naddre;… (Pars 328~331)

次の例では *ther* で始まる語順にはずれているために否定や Two thinges が強調されていると思われる。

- (7) For yif that oon were destroyed, certes, *beynge schulde ther noon duellen* to no wyght,”…(Bo III, P11, 195)

- (8) *Two thinges ther ben* in which the effect of alle the dedes
of mankynde standeth,... (Bo IV P2, 22)

なお, ther-を含む副詞も文頭に来て倒置を惹起することがある。

- (9) And this is moore wysdom than for to wepe..., for *therinne*
is no bote. (Mel. 993)

- (10) *Therof cometh it* that... (Bo IV, P2, 29)

- (11) The thridde defaute is that men fallen in venyal synnes...
Therof seith Seint Augustyn that... (Pars 101)

- (12) for *therby wynneth he* the mooste partie of this world.
(Pars 850)

- (13) That oother grevance outward is to have damage of thy
catel. *Theragayns suffred Crist* ful paciently,... (Pars 665)

- (14) and, after the word of Jhesu Crist, it is the endeles blisse
of hevene, *ther joye hath no contrarioustee* of wo ne grev-
aunce; *ther alle harmes been* passed of this present lyf; *ther as*
is the sikernes fro the peyne of helle; *ther as is the blisful*
campaigne that rejoysen...; *ther as the body of man*, that
whilom was foul and derk, *is moore cleer* than the sonne;...
(Pars 1076~8)...倒置・非倒置が併存。

(14)の *ther as* と同じように場所を表わす *wher as* も倒置が起きるのは存在の *be* 動詞に限られるようである。

- (15) than is it divided in small parties of azymutz, as est, and
est by south, *wher as is the first azymutz* above the est
lyne;... (Astr II, 31 ,19)

§ 11 There と同じく *heere* も文頭に立つと倒置を起す。Her-を含む副詞でこの現象が起きるのも *ther-* の場合と同じである。

- (1) Lo, *heere may ye seen* that Job preyde respit a while,...
(Pars 178)

- (2) *Heere endith the descripcion* of the Astrolabie and *here begynne the conclusions* of the... (Astr I)
- (3) *Her shal ben the reste* of your labours, *her is the havene stable* in pmissible quiete. (Bo III, M10, 4)
- (4) For certes, God almyghty is al good; and therfore he for yeveth al, or elles right noght. And *heerof seith Seint Augustyn*:... (Pars 301~2)
- (5) *Heer-agayns suffred Crist* ful paciently... (Pars 668)
- (6) And *heerto accordeth Seint Paul* the Apostle in manye places. (Mel 1291)
- (7) And *herby is assoiled thilke thing* that thou puttest a litel herebyform... (Bo V, P6, 279)

§ 12 Al が頭位に来ると譲歩節を作り、必ず倒置が起る。特に al be it so that... の型が頻出する。OED によれば albe, albeit なる語はこの形から生じたものである。⁽¹⁷⁾

- (1) *Al were it* the fouleste cherl or the fouleste womman that lyveth, and leest of value, yet is he thanne moore foul... (Pars 147)
- (2) And, *al were it so that* she right now were deed, ye ne oughte nat,... (Mel 983)
- (3) But *al hadde it been* lefevel that felonous folk..., yit hadde I nought disserved of... (Bo I, P4, 202)
- (4) *al were this Nonyus set* in chayere of dygnite. (Bo III, P4, 15)
- (5) I fond the secunde degre of Aries sitting upon myn est orisonte, *all be it* that it was but litel. (Astr II, 12, 10)

§ 13 先の al be it における be は subjunctive 形であるが、この al がなくて譲歩を表わす型がある。

- (1) men shal hope that every tyme that man falleth, *be it never so ofte*, that he may arise thurgh penitence,... (Pars 90)
- (2) And by thys conclusioun maist thou take ensample in alle

the signes, *be thei moist or drie, or moeble or fixe*,...

(Astr I, 21, 67)

- (3) "This ys," quod I, "a fair thing and a precious, *clepe it as thou wilt, be it corolerie, or porisme, or mede of coroune, or declarynges*." (Bo III, P10, 152)

(3)の *clepe it* ...は *call it as you wish* のことで、主語は表わされず、形は命令文であるが意味はやはり譲歩を表わすものである。

§ 14 比較に用いられる *than* の節に倒置の起る場合がかなりある。

(2 : 2) § 6 の *as* と同様動詞に *be, do* がきたり、主語が重い場合に多い。

- (1) *more freele than is mankynde*. (Bo III P6, 38)

- (2) *nothyng nys fairere than is the thing that by resoun schulde ben addid to thise forseide thinges*. (Bo III, P10, 154)

- (3) *hem thynketh they been free and han no juge, namoore than hath a free bole*,... (Pars 898)

- (4) *Youre liberal grace and mercy strecchen hem ferther into goodnesse than doon oure outrageous giltes and trespass into wikkednesse*,... (Mel 1825)

- (5) *Alwey he maketh a "but" atte laste ende, that is digne of moore blame than worth is al the preisyng*. (Pars 494)

(5)では主格補語 *worth* が文頭に出ている。比較の *than* や *as* の節で主格補語が前に出ることは殆どない。

§ 15 比較級に *the* を伴う型において倒置が起ることが多い。これは主節に限られるようである。(3 : 0)

- (1) *Ever fro the hyer degree that man falleth, the moore is he thral*,... (Pars 148)

- (2) *And this is for as mucche as the hyer that they were in this present lyf, the moore shulle they been abated and defouled in helle*. (Pars 191)

- (3) *What brydles...whan evere the rather that it fletith in large*

yiftes, *the more ay brenneth in hem the thurst of havynge?*
(Bo II, M2, 20)

しかし次のように非倒置の場合もある。

(4) And eek the lenger that he tarieth, *the ferther he is fro Crist.* (Pars 1001)

(5) the moore it swelweth, *the moore desir it hath* to swelwe and devoure., (Mel 1618)

§ 16 否定を意味する語が文頭に来て倒置を起すことがある。ne をはじめとしてかなりの数の副詞が用いられている。

(1) *Ne in ydel ne in veyn ne ben ther put in God hope and preyeris*... (Bo V, P 6,300)...cf. Nec frustra sunt in deo positae
(18)
spes precesque...

(2) *Ne a fouler thral may no man ne womman maken* of his body than for to yeven his body to synne. (Pars 146)

(3) "*Ne wol ye nat swere* in alle manere; neither by hevene...; ne by erthe,... (Pars 589)

(4) But for to speken of the fer cause, as to what ende they shul come, or what shall finally bityde of hem in this caas, *ne kan I nat deeme* but by conjectynge and by supposynge. (Mel 1402)

(5) *Ne this ne seie I nat* now... (Bo IV, P4, 82)... cf. Neque id
(19)
nunc molior...

(6) *Ne also ne accordith nat the peple* to that I schal seyn,...
(19)
(Bo IV, P4, 218) cf. Nam ne illud quidem adquiescant...

しかし、(1)では ne 自体よりも Ne in ydel ne in veyn という否定の句が倒置を起しているとも考えられるし、(4)も ne に至るまでの句が倒置を惹起したとも考えられないことはない。(6)でも also がそうではないだろうか。(2), (5)ではむしろ目的語が強調のために先行して倒置となったのではないか。cf. § 23. (3)は意味上禁止命令文と考えられるから ne が先行するのは変ではな

い。事実命令文では禁止を表わすとき,しばしば *ne* が文頭に来るからである。
e.g. ‘ye peple, folk and governours of hooly chirche, to thy sone, to
thy wyf, to..., *ne* yeve thou nevere myght ne maistrie of thy body
...—Mel 1754~6. 以上の如くかなり *ne* については疑わしいが点があるが,
次のような否定, 準否定の場合も考慮に入れねばならないと思う。

- (1) She may have mercy, this woot I wel, if she do penitence;
but *nevere shal it be* that she nas corrupt. (Pars 872)
- (2) and though he do ere his feeldes plentevous with an hun-
dred oxen, *nevere ne shal his bytynge bysynesse forleten*
hym whil he lyveth, ne the lyghte riches ne schal nat beren
hym companye whan he is deed. (Bo III, M3, 7)
- (3) For certes, *namoore may maydenhede be restooored* than an
arm that is smiten fro the body may retourne agayn to
wexe. (Pars 871)
- (4) and, trewely, *scarsly may ther any of thise be* withoute
venyal synne,... (Pars 942)
- (5) Allas! *al to litel is swiche trouthe now yfounde*. (Pars 881)
- (6) “*unnethe arises he* out of... (Pars 92)
- (7) thilke synne is so greet that *unnethe may it been relessed*,
... (Pars 582)
- (8) ‘*Seelden, or with greet peyne, been causes ybroght to good*
ende... (Mel 1404)⁽²⁰⁾

(4)の *scarsly* は実は *and* にかかっている。

§ 17 これまでにあげた以外の副詞で時として又はまれに (§ 2) 倒置を起
すものに, *afterward*, *elles*, *eek*, *first* と接続や順序を表わすもの, *today*,
anon, *som tyme* と時を表わすもの, *withinne*, *up* と場所を表わすものがあ
⁽²⁰⁾
る。

- (1) *Afterward speke we* of scornynge,... (Pars 635)
- (2) and *afterward added I* to signes, degrees,... the whiche I
fond in my rote the yer of oure Lord 1397,... (Astr II, 45, 22)
- (3) for which men moste kepen hem wisely, *or elles may men*

synnen ful greuously. (Pars 914)

(4) and *eeek taken they* of hire bonde-men amercimentz,... (Pars 752)

(5) *First shaltow understonde* that...(Pars 318)

(6) *First shul ye clepen* to youre conseil a fewe of youre freendes ... (Mel 1166)---cf. §19 (f)(1).

(7) "For sothe," seyde Crist, "I seye to thee, *today shaltow been* with me in paradys." (Pars 703)--- cf. §18 (9).

(8) And werke nat alwey in every nede by oon counsellour allone; for *sometyme bihooveth it* to be conseilled by manye. (Mel 1170)

(9) *Somtyme comth grucching* of avarice; as.... *Somtyme comth murmure* of Pride; as.... And *somtyme grucchyng sourdeth* of Envye;... (Pars 502~5)

(9)では同じ *sometyme* が文頭にありながら三つ目の例では倒置になっていない。単調を破るためなのか、*comth* のようによく主語に先行して倒置される語でなく *sourdeth* が用いられているからなのか、いずれとも決し難い。

(10) For *withinne is ihidd the strengthe and the vygour* of men, in the secre tour of hir hertes,... (Bo IV, M3, 39) cf. Pars 172.

(11) *Up roos thanne an advocat* that was wys,... (Mel 1021)

(12) *Up stirten thanne the yonge folk atones*...(Mel 1035)

§18 これまでの各節には、文頭に来ても必ずしもはっきりと強調を帯びてはいないと思われる副詞を扱ってきた。つまり、§16 の否定詞 (*ne* を除いた) は別として、大体は修辭的色彩の比較的薄いものであった。以下は明らかに強調という修辭的目的のために文頭に置かれて倒置を惹起していると思われるものを扱う。

(1) *Allas! wel oghten they thanne have* desdayn...(Pars 152)

(2) Now sith that Jhesu Crist took upon hymself the payne of

alle oure wikkednesse, *muchel oghte synful man wepen and biwayle*,... (Pars 282)

- (3) it may wel wexe fieble and faille by vertu of baptesme, and by the grace of God thurgh penitence; but *fully ne shall it never quenche*,... (Pars 340~I)

- (4) Certes, man shal loven his enemy, by the comandement of God; and *soothly thy freend shaltow love* in God. (Pars 522)

- (5) allas! allas! *nedeles is he recreant and nedeles despeired*. (Pars 698)

- (6) For sikerly, as for to speke proprely, we may do no thyng, but oonly swich thyng as we may doon *rightfully*. And certes *rightfully ne mowe ye take no vengeance*, as of youre propre auctoritee. (Mel 1384~5)

- (7) "*Moch more thanne*," "quod sche," *ben schrewes unsely* whan thei ben wrongfully delivred fro peyne, thanne whan they ben punysched by ryghtful vengeaunce,... (Bo IV P4, 128)

- (8) that is to seyn, that *more unsely ben they* that doon wrong to othere folk, than they that the wrong suffren. (Bo IV P4, 221)

- (9) For certes *thilke same day was receyved the accusynge of myn name*. (Bo I, P4, 130)

(7), (8)のように比較級が頭位において強調されていると思われるのは, "Certes," quod sche, "that is that *thise wikked schrewes ben more blisful*, or elles lasse wrecches, that abyen, the tormentz that thei han desservid, than if no peyne of justise ne chastisede hem. (Bo IV, P4, 78) と比較して言えるのではないかと思う。(8)については補語の項でも触れる予定である。要するに一般に比較級が頭位に出ると強意となる。その例は Pars 600, 633, 643, Bo IV P4, 169 にも 見られる。

- (10) Now certes, sith that sweryng, but if it be lawefully doon, is so heighly deffended, *muche worse is forsweryng falsly*,

and yet nedeles. (Pars 600)

- (11) And whan this olde man wende to enforchen his tale by re-
sons, *wel ny alle atones bigonne they* to rise for to breken
his tale,... (Mel 1043)

- (12) And whan the soule is put in oure body, *right anon is*
contract original synne;... (Pars 334)

(9)において動詞が分離していないのは §17 の(10)と同じである。

§ 19 種々の前置詞に始まる副詞句が文頭に来て倒置を惹起している。その殆どが前文の内容を受けて頭位におかれていることは文脈はもとより、指示詞、特に *the same, this* といった類の語が句中の名詞についていることでもわかる。これらの句を内容によって分類すれば12に分つことができるが、その大抵がこれまで主として扱ってきた単独副詞と意味内容の点で合致するところがあっても当然であろう。場所を表わすものが最も多く(47)、起源(25)、関連(19)、順序(17)、方法・様態(17)、対立相応(16)、手段(12)、理由・原因(10)他はそれ以下の数である。代表的と思われる例をあげる。

(a) 対立相応を表わすもの

- (1) *To thise forseide thynges answerde Melibeus* unto his wyf
... (Mel 1001)

- (2) *Agayns the richesse of this world shul they han* mysese
of poverte,... (Pars 192)

(b) 理由・原因

- (1) And *by thise causes* weaxen *deliberacioun*,... (Mel 1034)

- (2) For *by the vengeance-takynge been the wikked man disseve-*
red fro the goode men, ... (Mel 1431)

(c) 場所

- (1) 'He hasteth wel that wisely kan abyde,' and *in wikked haste*
is no profit. (Mel 1054)

- (2) 'Under the hony of the goodes of the body is hyd the
venym that sleeth the soule.' (Mel 1415)

- (3) But it is lyk a monstre and a merveyle, how that, *in the presente sight of God, may ben acheved and performed swiche thynges* as... (Bo I, P4, 195)

(2)(3)共に動詞要素は分離していない。

(d) 方法・様態

- (1) 'If God ne kepe the citee, *in ydel waketh he* that it kepeth.'
(Mel 1303)
(2) For right as he..., *right in the same wise (=right so) is it resoun* that he have harm... (Mel 1543~4)
(3) and *by that way leseth resoun* the lordshipe... (Pars 265)

(e) 起源

- (1) therof they thanken oure Lord Jhesu Crist, *of whom procedeth al wit and al goodnesse*. (Pars 1081)
(2) *Of this roote eek spryngeth a seed of grace*,... (Pars 117)
(3) *Of Avarice comen eek lesynges*,... (Pars 795)

(f) 順序

- (1) *Next this folewith the cercle* of the daies,... (Astr I, 9,1)
(2) For this ... was Jhesu Crist first bitraysed, and *after that (=thanne) was he bounde*,... (Pars 277)

(g) 手段

- (1) And *by riches* may a man gete hym grete freendes. (Mel 1555)
(2) that is to seyn the werk of generacioun, *by which generacioun only duelleth and is susteyned the longe durablete of mortel thinges*. (Bo III, P11, 173) ...動詞要素は分離していない。

(h) 随伴

- (1) and *with Rhethorice com forth Musice*, a damoysele of our hous,... (Bo II, P1, 43)

この例一つだけのようにある。

(i) 関連・対象

- (1) and *of swiche wommen seith Salomon* that... (Mel 1087)

(2) And *upon thilke chapitre seith Seint Gregorie*… (Pars 238)

(j) 条件

(1) right so *withouten hire conseil shul ye nat* accorden yow
ne have pees… (Mel 1782)

この例一つだけのものである。

(k) 基準・根拠

(1) and *by that same proporcoun is every quarter divided*
(Astr I, 16, 4)

(2) *By this cercle equinoxiall ben considered the 24 houres
of the clokk;*…(Astr I, 17, 32)…動詞要素は分離していない。

(l) 比較

(1) And where as ye seyn that Fortune hath norissed yow fro
youre childhede, I seye that *in so muchel shul ye the lasse
truste* in hire and in hir wit. (Mel 1453~4)

(2) and in as muche as hym thynketh his synnes moore hevy and
grevous, *in so muche semeth his payne* the lighter and the
esier unto hym.’ (Mel 1499~1500)

§ 20 次は頭位に理由の副詞節が来て倒置が起きたとも考えられる唯一の例である。

(1) And *for they shullen have noon hope to escape, seith Seint
Job* atte laste that “ther shal horroure and grisly drede dwellen
withouten ende.” (Pars 223)

しかし頭位の副詞節と関係があるのは *seith Seint Job* よりむしろ *that* の節の中の引用文ではないだろうか、ということが考えられる。ではこの倒置をどう説明するか。参考として、Mätzner は⁽²¹⁾ “The verb stands archaically and poetically at the beginning of the speech: *Quoth Hudibras*, “I smell a rat” (Butl. Hud. I, 1, 821)とし、同頁の詳注で “The postposition of the subject, and the position of the personal form of verbs of all kinds at the commencement is in Old-Engl. especially peculiar to

poetry: とし *Quoth Alisaundre, with voys hynde,...* や *Sayde the kyng: ...* の例を引いているのを見る。しかし次のように同じ case でありながら非倒置の例もある。The firste is that *if a man be baptized after that he hath synned, Seint Augustyn seith*, “But he be penytent for his olde synful lyf, he may not bigynne the newe clene lif.” (Pars 96~7)

§ 21 目的語は通常、動詞の後に来ることは先に述べたが、種々の理由で主語、動詞の両者より先行したり、主語と動詞の間にはさまれることがある。以下三つに分けて見ていきたい。

§ 22 いわゆる直接話法の伝達者とその伝達行為を表現するのに §6 の(1), (3)の如き方法が Melibee や Parsons Tale では多く用いられているのに気付くが、内容上直接話法が最も多く用いられている Boece では “...” quod + 主語の型が退屈さを覚える程おびただしい。以下伝達の型を例に依って示すことにする。

(1) For *Job seith*, “Synful men doon werkes worthy of confusioun.” (Pars 134)

(2) For certes, *as seith Seint Jerome*, “the erthe shal casten hym out of hym,...”(Pars 174)

(3) “Lat calle,” *quod Prudence*, “thy trewe freendes alle,...” (Mel 1002)

(3)の quod はきまって伝達者である主語の前に置かれる。Chaucer においては say を用いてもこの倒置様式は変わらないのが普通である。cf. §20.

(4) “I was atte dore of thyn herte,” *seith Jhesus*, “and cleped for to entre. (Pars 289)

say の例は Pars 597, 633, 820, 845, 703, 983 にも見られる。しかし挿入句としては正常な語順が見られる。

(5) or elles, *he seith*, the feend enticed hym;... (Pars 584)

(6) or elles it is his destinee, *as he seith*, unto a certein age; or elles, *he seith*, it cometh hym of gentillesse... (Pars 585)

- (7) Further over *thei* (=these astrologiens: l. 31) *seyn* that the infortunyng of ascendent is the contrarie of these foreseide thinges. The lord of the ascendent, *sey thei* that he is fortunat whan he is in god place... (Astr II, 4, 44)

(7)の *sey thei* の倒置は §20 の(1)と比べると興味があるが、ここでは恐らく「The lord of the ascendent は」と書きかけて、伝達動詞とその行為者を VS の型で挿入し、ここで *that* の節によって考えを述べることに構文意識が変って、再び節内に *he* (=the lord) なる代名詞によって主語を立てたものなのであろう。

§ 23 動詞の目的語が頭位に来て倒置を起す場合が多いが、これには、これまで述べて来た大部分の頭位の副詞の場合と異り修辭的なもので、程度の差はあっても明らかに強調の働きをするものが多いと思われる。前文を承けて頭位に出た目的語には、§19 に述べたと同様に *this*, *that*, *the*, *same* などの指示詞がついているが副詞句の場合と異なり目的語は動詞との結びつきがよく、しかも文構成の主要素なのであるから自ら強調味が感得されるのは自然であると思われる。

- (1) *This tree saugh the prophete Daniel* in spirit,... (Pars 126)
- (2) *And al this suffred oure Lord Jhesu Crist.* (Pars 273)
- (3) *This tretis*, divided in 5 parties, *wol I shewe thee*... (Astr Introd. 25)
- (4) "*That wol I gladly do,*" quod sche,...(Bo III, P1, 43)
- (5) *And the same harm doon somtyme the smale dropes of water*,... (Pars 363)
- (6) Of the hyndre part of hir buttokes, it is ful horrible for to see. For certes, in that partie of his body ther as they purgen hir stynkyng ordure, *that partie shewe they* to the peple... (Pars 428~9)

(1)~(6)の例は前文を承ける目的語であるが、次のような場合はより明らかに強調が感じられる。

- (7) “*Ful greet angwyssh shul the synful folk have* at that tyme;… (Pars 169)
- (8) And *moore shame do they* to Crist, than dide they that hym crucifiede;…(Pars 643)… Cf. §16 (2) .
- (9) Certes, man shal loven his enemy, by the comandement of God; and soothly *thy freend shaltow love in God. I seye, thyn enemy shaltow love* for Goddes sake, by his comandement. (Pars 522~3)
- (10) Of whiche delices I not what joie mai ben had of here moevinge, but *this woot I wel*, that whosoevere wol remembren hym of…, he schal wel undirstonden that the issues of delices ben sorweful and sorye. (Bo III, P7, 9)…*this*は後出の that の節を指す。

§ 24 動詞の目的語が従属節，特に，大多数の場合主格関係代名詞の節，において主語と動詞の間に挟まることが時としてある。このような目的語には主として代名詞が用いられるが名詞もないわけではない。ただし多音節の名詞は用いられないようである。また反照目的語の代名詞もこの位置にはめったに見かけられないし二重目的語についても同様である。そしてこの SOV の型は OE においてもよく見られるもので，Chaucer の韻文にも頻出する。散文では Melibee と Parsons Tale に多く，後者では最初の 604 行までの15件を含め全体で22件，そのうち目的語が名詞であるのは5件にすぎない。

- (1) And moore shame do they to Crist, than dide they that *hym crucifiede*;… (Pars 643)

しかし次の(2)の hym は反照代名詞であり正常な位置にある。

- (2) The roote of this tree is Contricioun, *that hideth hym* in the herte of hym that is verray repentaunt, …(Pars 113)
- (3) wel may that man *that no good werk ne dooth* synge thilke newe Frensshe song, … (Pars 248)
- (4) Thre of his olde foes *han it espyed*, … (Mel 970) …従属節内

ではない。

- (5) outrageous wratthe dooth al *that evere the devel hym commaundeth*;…(Pars 558)

同じ目的格関係代名詞の節でも (5)と対照的なのは, *Mesure of wepyng sholde be considered, after the loore that techeth us Senek.* (Mel 991) であり、*Senek* が節内の主語である。この例文のような語順は他にはない。

- (6) much oghte synful men wepen and biwayle, that for his synnes *Goddess sone of hevene sholde al this peyne endure.* (Pars 282)… 関係詞節内ではない。

- (7) I speke this…, whan *reson it requireth.* (Pars 436)… 副詞節内。

- (8) Telleth youre cas, …and *yow governe* after hire sentence. (Mel 1002)… 命令文。

- (9) God *it* forbede! (Pars 881)

次に、いわゆる非人称動詞には与格の目的語がしばしば置かれるが、これは (1), (2), (3) のように動詞の前に置かれることが多い。

- (1) it seemeth that *yow suffiseth* to han been conseilled by… (Mel 1252)

- (2) “At every tyme that *me remembreth* of the day of doom I quake;… (Pars 159)

- (3) And therfore *yow is bettre* to hyde youre conseil… (Mel 1146)

- (4) Whan I ete or drynke, or what so that I do, evere *semeth me* that the trompe sowneth in myn ere;… (Pars 160)

二重目的語の配置については通常、与格+対格の順であるが、共に代名詞の時は次のような与格が後に置かれる型が見られた。

- (1) ‘Oure Lord hath yeve *it me*; oure Lord hath biraft *it me*;… (Mel 1000)

- (2) of the handes of folk that yeven *it hem*,… (Bo III, M2, 10)

不定詞において目的語が時として原形に先行することがある。これは韻文に多く見られるものであるが、Chaucer では散文にも見受けられ、Melibee に多い。

(1) that right anon thou do diligence ... in swich a wise that
thou ne wante noon espie ne wacche, *thy persone for to save*.
(Mel 1026)

(2) wherfore unto oure art it is nat pertinent to norice werre
ne *parties to supporte*. (Mel 1014)

§ 25 いわゆる主格補語は SVC の語順におかれるのが普通であるが、目的語の場合と同じで頭位に置かれると、程度の差は別として強調を表わすことが普通である。

(1) O, *a noble thyng and a cleer thyng is power* that is nat
fownden myghty to kepe itself! (Bo III, P5, 7) ... Cf. Bo II, P5,
185

(2) And David seith, '*Blisful is that man* that hath nat folwed
the conseilyng of shrewes.' (Mel 1198) ... Cf. Pars 392~402.

(3) "*Acursed be the bitternesse* of my synne, ... (Pars 274) ... 祈
願文

(4) right so as..., right so *litel worth is shrifte or satisfaccioun*
withouten contricioun ... (Pars 310)

(5) And therfore, '*bettre is a morsel of breed* with joye than
an hous ful of delices ... (Pars 633) ... 比較級による強調

(6) But *swiche ben the customes* of perturbaciouns, and this
power they han, that ... (Bo I, P6, 49) ... Cf. Bo P1, 50; P2, 54;
P5, 149 ... 前出の内容をうけたもの

(7) they shulle be naked in body as of clothyng; save the fyr
in which they brenne...; and *naked shul they been of soule*,
as of all manere vertues, which that is the clothyng of the
soule. (Pars 196~7)

従属節の中で主格補語が次のように主語と動詞に挟まれることが時たまあ

る。これは韻文ではよく見られるものである。

(1) *whan Adam and Eve naked weren*,... (Pars 325)

(2) *Allas! What nedeth man thanne to ben despeired, sith that
his mercy so redy is and large?* (Pars 705)

目的補語はSVOCと、目的語の後に来るのが普通であるが次のような例もまれにある。

(3) ‘*Whan that thy frend is deed*,’ quod he, ‘*lat nat thyne eyen
to moyste ben* of teeris, ne to much drye;... (Mel 992)

to moyste ben は(1), (2)の C のあり方と同じで、補語 ben²²が eyen に直ちに続いていないのに気付く。

§ 25 疑問文では、疑問詞が主語として用いられた場合を除き、主語と動詞は倒置される。助動詞 do は用いられていないが韻文では例がある。⁽²²⁾

(1) *Ne moveth it* nat the to seen the face...? (Bo I, P4, 12)

(2) *Is nat this* a cursed vice? (Pars 560)

(3) *Whider shal* thanne *the wrecched synful man flee* to hyden
hym? (Pars 173)

しかし次のように普通の語順で疑問文の資格を持つものが一つだけ見出された。口語である。

(4) “*Suffisaunce and power been* thanne of a kynde?” (Bo III,
P9, 31)

以上は直接疑問文についてであるが、間接疑問文として文中に繰り入れられた場合、通常は正規の SVO の語順(疑問詞が目的語である場合を除いて)をとるが、主語に比して動詞が軽い時(be 動詞に特に多い)にはしばしばもとの語順のままであるのが見られる。

(5) *And lat us considere also who been they*, and how manye
been they, and whiche *been they*, that consenteden to youre
adversaries. (Mel 1362)

(6) *the point of the label shal* than declare to thee, at what

houre of the day or the night *shal be flod*. (Astr II, 46, 16)
…動詞要素は分離していない。

(7) to wyten what *is penitence*, and whennes *it is cleped* Penitence, and in how manye maneres *been the acciouns or werkynge of Penitence*, and *how manye speces ther been* of Penitence… (Pars 82)

(8) but it is lyk a monstre and a merveyale, how that, in the presente sight of God, *may been acheved and performed swiche thynges* as every felonous man hath conceyved in his thought ayens innocentz. (Bo I, P4, 195) 動詞要素は非分離。

§ 26 感嘆文では主語と動詞が倒置になっているのが一般である。

(1) How gret scorn *woldestow han* of it! (Bo P6, 34)

(2) But glorie, how deceyvable and how foul *is it* ofte! (Bo III, P6, 1)

(3) “Lo, lo,” quod dame Prudence, “how lightly *is every man enclined* to his owene desir…! (Mel 1283)

(4) O precyous and ryght cleer *is the blissfulnesse* of mortel rychesses, that…! (Bo II, P5, 185)

(5) Tak keep eek how precious *is the name* of Crist, as seith Seint Peter:… (Pars 598)… 文に繰り入れられた感嘆文。

§ 27 命令文では、主語がついていることも甚だ多く、動詞の後に来るのが常である。

(1) *Suffre thou* therfore paciently;… (Pars 664)

(2) *skatere thou and tobreke* the weyghtes…(Bo III, M9, 43)…
主語は繰り返えされない。次と対照されたい。

(3) *Withstond* thanne and *eschue thou* vices; *worschiþe and love thou* vertues; …(Bo V P6, 304)

(4) to thy sone, to thy wyf, …, ne to thy broother, ne *yewe thou* nevere myght ne maistrie of thy body …(Mel 1755~6)…
禁止命令文。

なお祈願文では次のようになることがある。

- (5) right as oure Lord hath wold, right so it is doon; *blessed be the name of oure Lord!*" (Mel 1000)

勸奨文を一例あげる。

- (6) Speke we now of wikked conseil;... (Pars 639)

§28以上 Chaucer の散文において文の主要構成要素のとり正常ならざる位置を、ある一定の条件のもとで頭位に来る語句を主として中心に分類してきたのだが、まとめてみると次のようになるだろう。

(1)主語と述部動詞の位置が SV でなく VS と倒置された時、一般的には、動詞形が単純であればそのまま主語に先行し、複合形であればその内の一つ、助動詞が主語に先行し残りの要素は主語の後に置かれる。頭位に来る語が補語や動詞の目的語である場合を除き、これら残りの要素は主語の後に置かれるのが普通であるが、be+p.p.の場合分離しないこともある。

(2)倒置の起きる場合は平叙文においては別して二つになる。一つは頭位に前文を受けて連結的な副詞及び（または）副詞等価語句が来る場合と、このような要素が前文との連結性をあまり帯びずまたは全く独立したものとして頭位に来て修辭的働きをする場合である。他の一つは、やはり頭位に目的語や補語が、第一の場合の副詞語句と同じように、連結性又は修辭的機能を帯びて置かれる場合である。

(3)命令文に主語の付された場合や、感嘆文、疑問文（疑問詞が主語の時を除いて）では、主語と動詞は VS の語順をとるのが通常であり、

(4)主として従属節において補語、目的語、主語の位置に不規則なものが時として見られる。又不定詞の目的語が原形に先行することが時としてある。

(5)(1)~(3)を通じて、現代英語ならば見られる 助動詞do は全く用いられていない。

(6)総じて、SVO (C) の語順が絶対優位を占めているが、(1)~(5)に述べたような傾向ないし変則が多少を問わず例外を伴って見出される。

〔註〕

- (1) F. Mossé: A Handbook of Middle English tr. by J. A. Walker, The Johns Hopkins Press, Baltimore, 1952, P. 122. ただし原書には見当らない。
- (2) 榊井迪夫: チョーサー研究, 研究社, 東京, 昭和37, P. 181.
- (3) F. N. Robinson ed.: The Works of Geoffrey Chaucer, 2nd ed., Houghton Mifflin Co., Boston, 1957.
- (4) J. S. P. Tatlock & P. Mackaye: The Complete Poetical Works of Geoffrey Chaucer, The Macmillan Co., N. Y., 1957, P. 383.
- (5) 榊井迪夫: Ibid., P. 138.
- (6) A. G. Kennedy: A Bibliography of Writings on the English Language, Hafner Pub. Co., N. Y., 1961.
- (7) E. P. Hammond: Chaucer: a Bibliographical Manual, Peter Smith, N. Y., 1933.
- (8) D. D. Griffith: Bibliography of Chaucer 1908-1953, Univ. of Wash. Press, 1955.
- (9) W. Swieczkowski: Word Order Patterning in Middle English, Mouton & Co., 'S-Gravenhage, 1962.
- (10) F. Heussler: Die Stellung von Subjekt und Prädikat in den Erzählungen des Melibeus und des Pfarrers in Chaucers Canterbury Tales, Wessel, 1888.
- (11) F. N. Robinson: Ibid. Mel P.167~188, Pars P. 229~265, Bo P. 320~384, Astr P. 545~563.
- (12) D. J. Price ed.: The Equatorie of the Planetis, Cambridge, 1955. P. 137~148.
- (13) L. H. Gray: Foundations of Language, Macmillan Co., N. Y., 1939, F 239~240.
- (14) O. Jespersen: A Modern English Grammar, pt vii, Einar Munksgaard, Copenhagen, 1949, P. 59~61.
- (15) 例えば K. Sisam: Fourteenth Century Verse and Prose, Oxford; F. Mossé: Ibid.; P. Hamelius ed.: Mandeville's Travels, Oxford; P. Hodgson: The Cloud of Unknowing, Oxford.
- (16) W. Swieczkowski: Ibid., P. 105.
- (17) OED; ALBE と ALBEIT の項.
- (18) Boethius: The Consolation of Philosophy tr. by I. T. rev. by H. F. Stewart, William Heinemann Ltd., London, 1953, P. 410.
- (19) Boethius: Ibid., P. 326, P. 330.
- (20) H. Heuer: Studien zur syntaktischen u. stilistischen Funktion des Advevbs bei Chaucer u. im Rosenroman, Carl Winter, Heidelberg, 1932, P. 78.
- (21) E. Mätzner: An English Grammar tr. by C. J. Greece, Senjo Pub. Co., Tokyo. P. 536. なお L. Kellner: Historical Outlines of English

Syntax, Kenkyusha, Tokyo. P. 286 の、韻文の例であるが Ormulum 10382 からの引用文も参考になる。Forr wel bifor þatt Sannt Johann Wass borenn of hiss moderr, *Cnew he wel þe Laferrd Crist I Sannte Margess wambe.*

- (22) T. F. Mustanoja: A Middle English Syntax pt. I. Société Néophilologique, Helsinki, 1960 P. 607. "The development of *do* in negations and questions takes place mainly after the ME period, but it begins in late ME. An early case of *do* in a question occurs in Chaucer's poetry: - *his yonge sone...Unto hym seyde,- 'Fader, why do ye wepe?'* (CTBMK, 3622) There are prose instances dating from the 15th century:..."

参考文献

1. J. S. P. Tatlock & A. G. Kennedy: A Concordance to the Complete Works of Geoffrey Chaucer and to the Romaunt of the Rose, The Carnegie Institution of Wash., 1927.
2. The Complete Works of Geoffrey Chaucer, ed. W. W. Skeat, vol.8, Oxford U. Press.
3. R. M. Lumiansky, tr. by: The Canterbury Tales by Geoffrey Chaucer, Holt, Rinehart & Co., N.Y., 1964.
4. ボエティウス: 畠中尚志訳: 哲学の慰め, 岩波書店, 東京, 昭和28.
5. テョーサー: 西脇順三郎訳: カンタベリー物語, 河出書房, 東京, 昭和26.